

論文の内容の要旨

論文提出者氏名	成瀬 祐子
論文審査担当者	主 査 廣田 直子 先生 副 査 福島 智子 先生 ・ 石原 三妃 先生
論文題目 幼児期・学童期における給食の教育的価値 (The Educational Value of School Lunches in Early Childhood and Elementary School Age)	
<p>(論文の内容の要旨)</p> <p>成長期の子どもたちに提供される給食では、適切な栄養管理とともに教育的な役割が重視され、学校給食法や厚生労働省が示す児童福祉施設の設備及び運営に関する基準においても、給食を通した食に対する正しい理解や食を営む力の育成が掲げられている。このような現状を踏まえ、本学位論文は、成長期の子どもたちに提供される給食の教育的価値をテーマとし、5つの章で組み立てた。</p> <p>第1章では、学校及び保育所の給食について、食教育という視点を重視して、先行研究の成果と課題についてまとめた。</p> <p>学校給食については、食育基本法が成立した2005年から現在までに給食を活用した食育の研究が多くなされ、レビューもあったことから、それらに基づいて論じた。様々な観点で工夫された給食が提供されているにも関わらず、現行の給食提供そのものが給食を食べる子どもに及ぼす影響に焦点をあてた研究はほとんど見当たらなかった。</p> <p>保育所・幼稚園給食については、食育実践状況や食育活動の有効性に関するレビューはあったが、給食提供そのものの影響に着目したものはみあたらなかったため、ナラティブレビューを行った。</p> <p>国立情報学研究所のCiNii Researchを用いて検索を行い、採択した168件の内、給食が子どもおよびその保護者に及ぼす影響について調査、または、言及している論文は、子どもへの影響4件、保護者への影響5件のみであった。食育プログラム等の導入が、食意識の向上やレシピ活用などに有益であったと示唆されていたが、学校給食同様、既存の給食提供そのものの子どもや保護者に及ぼす影響に関する研究は非常に少なかった。</p> <p>第2章は本学位論文の中核となる主論文で、学校給食が小学生およびその家族に及ぼす影響について調査した研究成果をまとめた。この研究の特徴は、初めて学校給食を食べようになる小学1年生とその家族に焦点を当て、給食開始前から半年経過後までの変化を把握した点にある。</p> <p>長野県松本市の小学校11校に入学した子ども822名の保護者を対象とし、2021年の4月、6月、7月、10月に質問票調査を実施した。</p> <p>10月でも約7割の子どもが家庭で学校給食の話をし、約半数の家庭では、子どもの食への関心や子どもが食に関することを自ら話すことが増えていた。家族の食への関心が増加した家庭、食に関する話題が増加した家庭も半数以上だった。子どもが学校給食について家族に話をする家庭では、そうでない家庭と</p>	

比べ、家族の食への関心および食に関する話題が有意に増加していた。学校給食開始後の家族の変化に関する自由記述のテキストマイニング分析では、6月は報告に関するような語が多く、7月には家族内のコミュニケーションが推察される語が、10月には行動変容をうかがわせる語が上位に抽出され、経時的な変化をとらえることができた。家族の食への関心が強くなり、食生活改善への行動変容がうかがえる記述も見られた。子どもが学校給食のことを家庭で話すことがこれらの変化の重要なポイントであると考えられた。

第3章では保育所給食に焦点を当て、子どもが給食を食べるようになってからの子ども自身の変化が家族にどのような影響を与えたかに着目して研究を進めた。

長野県3市の公立保育所の4,5歳児クラスに通う保護者1,090人を対象に調査を実施し、396人（回収率36.3%）を分析対象とした。保護者の食育への関心度で「関心あり」群、「どちらかといえば関心がある」群、「関心がない」群に分け比較した。「関心あり」群は他の2群と比べ、保育所給食の献立を見ている、家庭の食事の参考にすることがある、給食で提供されている料理を家で作ることがあるの得点が有意に高かった。子ども自身および家族にあった変化に関する自由記述（177人分）で作成した共起ネットワークは、『挑戦・好き嫌いの改善』『家庭の食事への参考』『コミュニケーション』の3カテゴリーに分類できた。

保護者は、保育所給食に対して、子どもの好き嫌いの改善、初めての料理に挑戦する姿勢の育成など、良い影響を認識していることを明らかにし、子どもの食に対する姿勢の変化や、子どもが保育所給食について話すこと、保育所給食のメニューをリクエストすることが、保護者に影響していると推察された。

第4章では、ここまでの研究で明らかになった学校給食および保育所給食が子どもおよびその家族に及ぼす影響について社会的認知理論の観点で整理し、今後の給食提供を通じた食教育のアプローチについて検討した。学校または保育所等の給食提供という環境が子どもの食に関連した自己効力感の向上に有用であり、家族の変化は相互決定主義による家族間の影響と考えられた。今後はさらに、社会的認知理論を応用して、食育に関心が高くない家庭の食生活改善にもつなげる働きかけに関する検討が必要であることも明らかになった。

第5章は、第1章から第4章までの内容の概要を記述し、まとめとした。